OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	病名の変遷 : 西洋医学受容の影響を中心に
Author(s)	森賀, 一恵
Citation	語文. 1984, 44, p. 37-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68725
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

病名の変遷

—西洋医学受容の影響を中心に—

森賀一恵

一、はじめに

現在、日常的に用いられている病名は、かぜ、感冒、インフルエンザ、腸チフスなど、和語あり、漢語あり、洋語あり、混種語ありで、極めて多様である。日本語の病名がどのような過程を経て、現在のような語彙体系を持つに至ったのか、日本医学史に於いて画期的な出来事であったと思われる蘭学成立の時期以降の変化を中心に見ていきたい。

日本語の病名や成立過程を概観するに先立ち、語の個別的な成立過程の調査が必要であるが、ここでは『分類語彙表』(国立国語研究所・一九六八)と『類語新辞典』(角川書店・一九八一)を参考に、現在、日常的に頻用されていると思われる語を対象に調査した。以下、和語・漢語・洋語、及び洋漢混種語に分けて、調査結果の概略を記す。

二、和語について

あせも、かぜ、たむし、できもの、とりめ、はしか、はたけ、はやりめ、はれもの、吹出物、水虫、耳だれ、物もらい、わきがなどは、現在の和語の病名の中でも最も一般的なものであるが、これらは、次に挙げるような資料に既に見えている。

あせも 『和名類聚抄』(十巻本)、『名語記』(一二七五)

かぜ 『竹取物語』(一〇世紀中)、『源氏物語』(一一世紀前)、『わらんべ草』(一六五一奥書)

たむし 『文明本節用集』(一五世紀後)、『日葡辞書』(一六〇三)

できもの 『御湯殿上日記』(一四八一記事)、『嵐山集』(一六五一刊)

とりめ 『和名類聚抄』(十巻本)、『医心方』(九八四)、『毛吹草』(一六三八序)

はしか 『文明本節用集』、『多聞院日記』(一四八五記事)、『浮世物語』(一六五八～六一刊)

はたけ 『豊後風土記』(七一三)、『東大寺諷誦文稿』(平安初期点)、『和名類聚抄』(十巻本)

はやりめ 『書言字考節用集』(一六九八刊)、『乙二七部集』(一八三五刊)

はれもの 『成実論』(聖護蔵本・天長五年点)、『春色梅美婦禰』(一八四二刊)

吹出物　『高点部類』（一七七五刊）
水虫　『本朝医談』（一八二三年刊本あり、成立はそれより以前）、『浮世風呂』（一八〇九～一三刊）
耳だれ　『運歩色葉集』（一五四八）、『紅梅千句』（一六五五刊）、『浮世風呂』
物もらい　『書言字考節用集』、『後編風俗通』（一七七五刊）
わきが　『伊京集』（室町末）、『風俗八色談』（一七五六刊）
また、『病名彙解』（一六八六刊）に「風ヲヒクコトナリ」（巻一・冒風）「俗に云タムシ也」（巻四・頑癬）、「俗ニ云トリ目也」（巻六・雀目）、「俗ニ云ハシカ也」（巻五・麻疹）、「俗ニ云ミミダレノコト也」（巻五・聤耳）「俗ニ云ワキガノコト也」（巻四・慍羝）などと俗語として名の挙がっているものが多く、十八世紀末からの蘭書翻訳期にはかなり一般化していたようであるが、蘭訳書類には殆んど現れない。

現在用いられている和語の病名は蘭学成立前に存在してはいたが俗語で日常レベルで使用されるにとどまり蘭学成立による意味変化もなく、西洋医学受容の影響も比較的小さかったといえる。しかし、現在のマラリアに当たる「おこり」、天然痘に当たる「もがさ」など『病名彙解』では俗語とされている語で現在は殆んど用いられない和語もあり、和語の病名が全く西洋医学の影響を受けていないとはいいきれない。

三、漢語について

『病名彙解』に見える漢語の病名のうち、現在も日常的に用いられているもの（少々の語形の違いは無視する）を挙げると次のようになる。（項目として記載のあるものは巻数のみを、項目として挙がってはいないが文中に現れるものは項目名をも示した。）

破傷風、疱瘡、乳岩、癟疽、痘瘡（巻一）、中風、淋病、瘰癧、黄疸、脚気、感冒、喘息（哮喘）（巻二）、丹毒、脱肛、痛風（巻三）、鬱症、潰瘍（巻四）、麻疹、健忘、結核、癌（痼發）、癲癎（巻五）、痔（痔漏）、腫瘍、風疹（蛇風）、赤痢（ルビはシャクリ）（巻六）

これらは全て、『大漢和辞典』に以前の中国の用例があるため、中国起源であるといえる。

右の語のうち、「麻疹」は「本病への認識」が「東洋に於ても西洋に於ても相当古くからなされていた」（『明治前日本医学史』第一巻・P.284）ためか、『蘭療方』（麻疹）、『和蘭字彙』（mazelen）、『扶氏経験遺訓』（以下『遺訓』と略す）（巻十九・第十一篇）などの蘭方書類にもそのまま訳語として用いられている。

「感冒」も日本初の蘭訳内科書である『西説内科撰要』（以下『西説』と略す）に、

冒寒傷冷ト曰フト雖モ。感冒ナラヒニ傷風寒ト。大同ニシテ小異ナリ。（巻九・咳嗽篇）

とあるのを初め、『蘭療方』、『泰西熱病論』（巻一・間歇熱篇第二）『泰西疫論』（神経疫部・第四章）、『医療正始』（巻二・宗類第一・属類第一）、『察病亀鑑』（巻二・第二篇）などの蘭方医書類に頻出している。

破傷風、疱瘡、癟疽、痘瘡、中風、淋病、瘰癧、黄疸、脚気、喘息、丹毒、脱肛、痛風、健忘、癲癎、痔なども、洋の東西を問わず存在する普遍的な現象や概念を表す語であったためか、この二語

と同様の傾向を示す。これらは『医道日用綱目』（宝永六年序）や『鍼灸重宝記』（享保三年刊）などにも見え、蘭学成立以前に日常語化していたようである。

「風疹」は『病名彙解』の他にも『病名纂』（多紀元簡輯）や蘭学最盛期の『時還読我書』（一八三五記事。多紀元堅著）に見られるが、蘭方医書類には見えず、『遺訓』に「律別屋刺（リツベツヤシ）」（巻十九・第十一篇）、明治九年の『華氏内科摘要』（以下『華氏』と略す）に「ロベオラ」（巻十三・第七編・一）と音訳されており、「風疹」は訳語として一般的ではなかった。『漢洋病名対照録』（第三版）（以下『対照録』と略す）には rubeola の訳語として「風疹」が現れ、この頃から徐々に使用されるようになっている。「風疹」は「その症麻疹に異ならず。……軽易の症として大抵の方書には、別に部門を設けてこれを記載することなし。」（『日本疾病史』・P.212）というわけで、西洋にも同じ病気がありながら、訳語としての使用が遅れたのだろうと考えられる。

『大漢和辞典』には「乳巌」の用例として次の二つが挙げられている。

乳巌、…若未破可療、已破即難治、捻之、内如山巌、故名之。（瘡瘍全書・乳病證治）

…亦有二三載或五六載、方潰陥下者、皆曰乳巌、蓋其形巌凸、似巌穴也。（醫按・癰巌治法）

これらによると「乳巌」は岩のように固い乳房のしこり、或いは潰れて岩穴のような形状を呈する乳房の腫瘍の類を指し、現在の「乳癌」と全くの同義であるとはいえないまでもそれを含んでいると思われるが、本来の意味は「乳房の巌（のようなもの）」ということとしく、元来「巌」単独では癰疽の意を持たないため「癰巌」という語も存在していたのではないかと思う。明の李梴の『医学入門』では、

潤一寸至二寸為癤。一寸至五寸為癰。…已潰深陥如岩為癌。…（癰瘤痼多難治○癌多生乳脇…（巻五・癰疽総論）

のように、巌の意の「嵒」に「疒」が付され単独で、潰れて穴があき岩のようになった。癰疽の意を表す「癌」が用いられている。しかし、ここでは「癌」はまだ単なる癰疽類の一形態に過ぎない。『病名彙解』では『医学入門』のこの部分が引用されており、その引用文中に於いてのみ「癌」がみえるが、独立の項目は設けられておらず、漢方では余り重要な語ではなかった。大槻玄沢が一七九二年に完訳した、日本翻訳外科書の嚆矢『瘍医新書』では「総目」（首巻）の「第四腫瘍部」中に「癌第十二」の項目がみえ、また「外科誘導篇」第四章」（首巻）に

癌腫ノ結槐ヲ截リ除クノ法ヲ以テ安全ノ平體ト為ス者

とあり、カンケル（カンケル）に「癌（腫）」という訳語が当てられている。『療治瑣言』（一八四二。新宮涼庭著の蘭方医書。翻訳書ではない）に、

蘭書ニ此病門ナシ然レモ蟹腫一症ヲ論スレハ別ニ病門ヲ立スシテ可ナリ則チ舌疳（俗名舌疽）、失栄ノ類モ同シク蟹腫ナルヲ以テ蘭書に同シク病門ヲ立ズ（巻中・贅噎）

とあることからもわかるように漢方では癌の概念がなかったが、乳房のカンケルが「乳癌」と訳されたのは自然なことであり、その「乳癌」から「乳」を除いた「癌」を玄沢が最初にカンケルの訳語に当てたものらしく、それによって、癰疽の一形態であった「癌」は腫瘍の一種を指すことになった。

その後の蘭方医書類では、前出の『療治瑣言』の「蟹腫」、『和蘭内外要方』の「蝦腫」（巻一・目次）のような義訳もあるものの、『増補重訂内科撰要』の増補部分に

頑硬腫ハ……或ハ変ソ癌瘡トナリ（巻十四）

と、「癌瘡」が出てくる他、『蘭科内外三法方典』（巻四・十三）、『泰西熱病論』（巻五・痘瘡篇第九）、『眼科新書』（巻一・眼瞼病篇第三・眼瞼電腫）、『泰西方鑑』（巻四・女科）、『瘍科新選』（巻一・硬腫部・大較第二十七）、『医療正始』（巻十三・局発煩衝・煩衝総論・区別・第三）、『遺訓』（巻二十三・第十三篇）、『済生三方』（巻中・阿片第二・応用・姑息ノ能）、『外科医法』（巻二・煩衝論第二編一・第三硬結）など、蘭書翻訳の初期から後期まで「癌」は頻用されており、蘭学者の間では基本的な訳語として通用していたといえよう。また、『華氏』（巻八・第四編）に、

腎臓癌腫　カンクル、オフ、ゼ、キヅ子――　英

『洋漢病名一覧』（続編）（癌）に

洋名カンケル又カンクル癌ト訳ス

などと、明治期の英訳書などにもそのまま受け継がれ、現在に至っているようである。

『瘍医新書』の「総目」には、「癌」の他、「腫瘍」「潰瘍」の項目もあり、漢籍に造詣の深かった玄沢が好んで訳語に用いた中国起源の漢語が現在も重要な腫瘍類を指す語として日常的に用いられているのである。

「結核」は『病名彙解』では「果ノ核ノヤウ」に「グリグリ」（巻一・乳結核）した「癆瘵ノ類」（巻五・結核）つまり腫瘍の一種であり、蘭書翻訳期の初めの頃の『厚生新編』（一八一一）（巻二）、『泰西方鑑』（巻五・外科）、『瘍科新選』（巻一・腫瘍篇上・硬腫部）などでは同様の意味で用いられているが、『医療正始』に「此病人肺煩衝ヲ得テ之ヲ療ズル間。四年以来。患フル所ノ結核性ニシテ…」（巻十五・胸腔諸煩衝・肺臓胸膜等煩衝類案第一）と初めて現在と同じ tubercles の意の「結核」が現われ、『遺訓』（巻十二・第七編・巻十四・第八編）、『察病亀鑑』（巻下・第二編・五）、『華氏』（巻一・初篇）など、蘭訳後期から明治初の英訳期にかけては専ら tubercles を指すようになっている。中国在住の英人医合信(Benjamin Hobson・在中国一八三九～七三）著の『内科新説』に「勞証因肺体生堅粒如沙、番名嘟吡呦叻」（上巻・勞証）と結核について記載があるが、「結核」は見えず、これも「癌」と同じく蘭学者によって付された新しい意味が中国にも逆輸入され、現在も通用しているのである。明治期の小説には（『日本国語大辞典』の用例による）結核症や肺結核症を指す「結核」が早くも現れる。

現在では dysentery の意である「赤痢」は明の戴元礼の『證治要訣』（『大漢和辞典』より）や『病名彙解』では血性下痢のことで蘭書翻訳期にも同様の意で用いられている。dysentery の意の「赤痢」の初出は『和英語林集成』（第三版）で『対照録』の頃にはそれまで訳語として用いられていた「痛痢」、「痢疾」、「痢病」などより「赤痢」が一般的になり、以後の医学辞典類には「赤痢」しか用いられない。

「結核」、「赤痢」は、蘭学成立後も一時は従来通りの意味で用いられていたが、その後意味の変化した語である。

以上は、漢籍に典拠のある漢語であり、他の現在は日常的に用いられない漢方用語とは異なり、翻訳の際、『解体新書』にいう狭義の

「翻訳」によって訳語にあてられ、西洋医学用語に組み込まれて、現在も残るものである。

『病名彙解』や『医道日用綱目』、『鍼灸重宝記』などには見えないが、現在日常語として用いられる語には次のようなものがある。

胃炎、胃潰瘍、胃拡張、胃下垂、胃癌、疫痢、壊血病、肝炎、肝硬変、狭心症、血友病、高血圧、黒内障、湿疹、猩紅熱、腎炎、心筋硬塞、蕁麻疹、躁鬱病、躁病、脱腸、蓄膿症、中耳炎腸炎、腸捻転、低血圧、天然痘、日射病、尿毒症、脳溢血、脳炎、脳充血、脳出血、脳震盪、脳軟化(症)、脳貧血、肺炎、肺浸潤、敗血症、白血病、白内障、麦粒腫、鼻炎、夢遊病、盲腸炎、夜尿症、夜盲症、流行性感冒、緑内障、助膜炎

『西説』で「失苟児陪苦」と音訳されていた scheurbuik(蘭) に対し、蘭学初期には

敗血病（成徳云和蘭ニ是レヲ失苟児陪苦ト云フ　敗血病ノ名ハ予カ新定ニ出ツ）（泰西熱病論・巻二・血液烊崩腐敗篇第五）

壊血病（内科撰要所ㇾ謂失苟児陪苦）（眼科新書・巻一・眼瞼病篇第三）

のように、「壊血病」「敗血病」の二つの義訳の例があるが、『眼科新書』とほぼ同時期の『泰西熱病論』の「敗血病」が「新定」の訳語であることから、「壊血病」も杉田立卿の新造語ではないかと思われる。蘭書翻訳期には「失苟児陪苦」が一般的で頻用されたものの、「壊血病」も同じ立卿訳の『瘍科新選』（巻三・壊血瘍第八十八）を初め、『西医知要』（巻三）、『和蘭字彙』、『外科医法』（巻二・焮衝論第二編一・第四軟化）などに用いられている。明治以後は蘭語の音訳「失苟児陪苦」が徐々に使用されなくなったことや、septaemia の訳語としての「敗血病（症）」の出現などで、「壊血病」が一般的になった。

また、『眼科新書』の「麦粒腫」（巻一・眼瞼病第三篇）、『瘍科新選』の「肉腫」（巻二・腫瘍篇上）は共に初出の用例で、原語の義訳であり、これらも立卿の新造語である可能性が高い。

「猩紅熱」（医療正始・巻四・宗類第一・属類第二・遺訓・巻四・第三編など）、「蓄膿症」（遺訓・巻十二・第七編・上顎洞の蓄膿症を指す用例ではない）、「夜盲」（一八五五・病名薬名和洋便覧・『日本語に及ぼしたオランダ語の影響』P.164）も、前の三語と同じく蘭書翻訳期、原語の義訳により日本で作られたものである。

「天然痘」は『内科秘録』（一八六四）には既にみえるが、人工的痘瘡である種痘に対する語であるから、牛痘種法が伝えられてから使われるようになった語であろうと思われる。一八二〇年に馬場佐十郎が我国初の牛痘種法書『遁花秘訣』（『日本思想大系』65所収）を訳了した（「日本の医療文化史」（55）による）が、この書にはこの語はない。中国在住の英人医スタアントンが漢訳した『泰西種痘奇法』が一八四一年に、中国人医邱浩川の『引痘略』が一八四六年に訓点・校刊されており（同前）、これらの書に「天然痘」が用いられていてそれを通じて日本に輸入された可能性もある。

「胃炎」、「肝炎」、「肺炎」などの語尾に共通する「炎」は「炎症」（和蘭語 ontsteeking 羅甸語 inflammatio・英語 inflammation）の「炎」であるが、蘭学期の翻訳医書類には「―炎」という形の語も「炎症」も全く現れない。『西説』では「翁篤私爹金倔（ヲン・ト・スティキング）」（巻四・黄疸篇第八・第六十二章発黄ノ熱病ニ因ルノ証治ヲ論スなど）と音訳し、『蘭療方』では「翻訳」して漢籍に典拠のある「癰疽」を当

ているが、『瘍医新書』では義訳により「瘍腫瘍」（首巻・総目）という語が新造され、『蘭科内外三法方典』では「瘍」を省いた「瘍腫」（巻四・十四）が用いられている。『泰西熱病論』には「瘍衝」（巻一・単熱複熱瘍衝熱篇第一）がみえ、『増補重訂内科撰要』では『西説』で「翁篤私爹金倔」であった所が「瘍衝」（巻四・黄疸篇第九・第六十七章黄疸。熱病ニ因ルノ症治ヲ論スなど）となっている。その後の蘭方医書類では、外科的具体的で皮膚などの場合は「瘍腫」、内臓など内科的な場合は「瘍衝」という使い分けをしているものもあるが、特に「瘍衝」は幕末の蘭方医書類で頻繁に用いられており、この語が蘭方医学用語の中でかなり重要な位置を占めていたことがわかる。一方、前出の合信の『西医略論』（一八五七）に「西国方言日炎法美順訳為炎熱之意、故名日炎証」（巻上・炎証論）、同じく『内科新説』（一八五八）に「熱痛紅腫謂之炎、番語炎法美順、與華語焼字之意略同、四證不必全備、…此證患者最多、中土無名、医書不載、余於西医略論中専列一篇、発明此證、…肺炎初起痰少久後痰多、…脳炎顱頂痛、…肝炎右脇下痛漸生膿瘡、…腎炎腰痛」（巻上・炎證論）とあり、「炎法美順」（inflammation）を「炎証」と義訳し、初めて「肺炎」、「脳炎」「肝炎」、「腎炎」などの語を用いたのは合信であることがわかる。『西医略論』は一八五八年（『日本医学史綱要』P.120）、『内科新説』は一八五九年（『明治前日本医学史』第三巻P.149）に三宅艮斎が訓点を施し翻刻出版しており、「炎症」、「肺炎」などは、それらの書を通じて日本に輸入されたものと思われる。明治六年の『医語類聚』（奥山虎章）には「炎症」や「胃炎」が現われ、『華氏』、『洋漢病名一覧』（後編）、『対照録』でも、「瘍衝」もみられるが、「炎症」、「―炎」がしばしば用いられており、この頃から「―瘍衝」は「―炎」に「瘍衝」は「炎症」におされて徐々に使用されなくなったようである。『和英語林集成』（第三版）では初版にみられなかった「―炎」の形の語もみえる。

『外科医法』の凡例には「病名訳名はつとめて、先輩当ておかれし文字を用う、全體新論西医略論などより襲用する所もあり」とあり、合信の用語が当時の日本の医学用語に与えた影響は見逃すことのできないものであった。

『華氏』には「脳ノ震盪」（巻十・第五編）という語がみえ、それが「脳震盪」につながると思われるが、この語と同じ構成（臓器名＋状態名）を持つ語の初出の用例の出典の年代をみると（出典については解題参照）

胃拡張（一八九九）、胃下垂（一九〇六）、肝硬変（一九二四）
・肝臓硬変は一八八八）腸捻転（一八九九）脳溢血（一八八八）
脳充血（一八八八）、脳震盪（一八九九）、脳軟化（一八七六）、
脳貧血（一八八八）

と、一八七六年から一九〇六年の間に集中しており、構成の順序こそ違え、それらの語の範疇に入ると考えられる「脱腸」、「狭心症」の初出も『対照録』（一八八八）である。よく似た構成の「心筋梗塞」の「心筋」は臓器名ではなく『懐中和羅独英医語辞典』（一八九九）に初出の新しい語で「心筋梗塞」の初出も一九五八年の『医学大字典』で時代が少し下るが、このように、臓器名＋状態名の構成を持つ病名が明治初期に多く成立しているのは、一八六六年頃からの「病理解剖を基盤とする医学の受容」（『近代日本の医学』P.318）の影響の表われではないかとみられる。

「毒麻疹」は原語の義訳で、蘭学期に「毒麻熱」（幼々精義・巻四

・八)、「蕁麻羅斯」(遺訓・巻十九・第十一編)、明治初に「蕁麻瘡」(華氏・巻十九・第十編)などの訳語もあるが、『対照録』には「蕁麻疹」の他、「湿疹」、「汗疹」、「痒疹」などもみられ、語尾に「疹」の付く皮膚病名は明治初期から一般的になったように思われる。

「血友病」(初出一八八八)、「糖尿病」(初出一八八八・『糖尿』は『華氏』にあり)、「日射病」(『華氏』初出)、「敗血症」(初出一九〇六)、「白血病」(『華氏』初出)なども「蕁麻疹」などと同じく、明治の洋書翻訳期(英米書中心)に原語の義訳により新造された病名である。

「黒内障」(『医語類聚』初出)、「白内障」(『和英語林集成』第三版初出)、「緑内障」(一八九三年『袖珍医学辞彙』初出)は漢方の「内障」に色彩名を加えて作られた訳語である。

「胃癌」(『華氏』初出)、「胃潰瘍」(一八七八年『増訂医語類聚』初出)も、漢籍に典拠のある「胃」と「癌」、「潰瘍」の組み合わせによって成った語である。

「流行性感冒」は『対照録』初出であるが、『日本国語大辞典』「感冒」の項の『兎園小説余録』の用例から判断する限りでは「感冒」が「流行」するという言い方は江戸期に既に一般的であったらしく「一性」も蘭方医書にはしばしば用いられていたので、この語も既存の語を組み合わせて influenza を意訳したものである。

このように、医学用語の充実に加えて、日本医学の水準が西洋医学の病気の概念を確実に把握できるまでに向上した明治の初め頃から、既存の通用語や病名を用いて原語の的確な意訳も行なわれるようになった。

「疫痢」は『泰西疫論』(神経疫部・第三章)、『内科秘録』(巻三・痢疾)などにみえるが、その意は、疫病かつ痢病、つまり赤痢の流行のようなもので、現在の「疫痢」とは直接つながらない上、熟した語ではなかった。一九二三年以前に刊行された医学辞書類にこの語は見えず、一九二三年から一九三二年にかけて執筆された『日本医学史綱要』にも明らかに疫痢だと思われる「小児暴瀉」の記載があるが、「疫痢」は全く出ていない。一九三二年刊の『現代医学大辞典』には「疫痢」(羅・独・英・仏語共に Ekiri)があらわれることから、この語は一九三〇年頃から、小児暴瀉の病名として日本で新しく用いられるようになった語であると考えられる。

同じ頃から一般的になったと思われる「高血圧」(初出一九三二)は、少しおくれて現れる「低血圧」とともに、既存の語の組み合わせにより成立した語である。

『明暗』(一九一六)に用例のある「夢遊病」は、蘭学期より用いられていた「夢中遊行」が、「夜尿症」(初出一九二四)は「夜間遺尿(症)」がそれぞれ短縮されたものではないかと思われる。

『対照録』(上・未明解剖的神経諸病)には「一種回帰狂ト名クル一病アリ其症ハ癲狂ト鬱憂トノニ病時々回帰シテ……」とあり、躁鬱病は「回帰狂」、躁病は「癲狂」となっていることがわかり、明治の初めにはまだ「躁鬱病」も「躁病」も用いられていない。二語とも初出は一九三二年の医学辞典で、精神医学の発達のおくれがこれらの精神病名の確立をおくらせたようである。

四、洋語及び漢洋混種語

アデノイド、アレルギー、インフルエンザ、カタル、胃カタル、腸カタル、カリエス、コレラ、ジフテリア、チフス、腸チフス、パ

ラチフス、トラホーム、ノイローゼ、ヒステリー、ペスト、ヘルニア、マラリア、リューマチなどは現在の代表的な洋語の病名である。右のうち、「リューマチ（チ）」は『医療正始』（巻三・宗類第一・属類第一）、『幼々精義』（巻七・第十七）、『察病亀鑑』（巻中・第二編疾病之診察・其二呼吸）、『遺訓』（巻六・第四編）、『済生三方』（巻下・吐薬第三・各異応用）、『内科秘録』（巻七・臍噫）などに「僂麻質斯」「僂麻質」、「僂麻窒斯」などと書き表され、『外科医法』（巻二・燃衝論第二論一）では「傷風」の左ルビが「レウマチス」となっているので、蘭学期に受け入れられていたといってもよいかもしれない。しかし、用例の出典のうち翻訳書は蘭訳であれ独訳であれ原著がドイツ書であり、蘭語・独語・英語の形がよく似ており、『西説』以来の訳語である「失苟児陪苦」、「羅斯」、「伊窟篤」、「聖京倔」などと異なり、純粋の和蘭語からきたものではない。

「ヒステリー」、「チフス」についても「リューマチ（ス）」と同様のことがいえる。

日本では、一八六八年に松山棟庵が『窒扶斯新論』を訳して発疹チフスと腸チフスの区別を明らかにしており、「腸チフス」の名称はこの時から用いられた（『明治前日本医学史』第一巻・P.288）ようであるが、『和英語林集成』（第三版）の「チフス」の項にもみえ、「チフス」とともに明治初期にはかなり一般化していたと思われる。「Paratyphus は西暦一八九四年（明治二七年）アシアール Achard バンソード Bensaude によりて『チフス』より分離されて命名されたもの」（『明治前日本医学史』第一巻・P.286）であり、日本では一九〇六年の『独羅和訳新医学大辞典』に初出である。

「ペスト」も『泰西方鑑』（巻一・発無定處・伝染熱）『医療正始』（巻九・宗類第一・属類第三）などに音訳があり、明治初期の『華氏』にも「百斯篤（ペスト）」（巻十五・第八編）とあるが、『華氏』では「僂麻質斯」、「失苟児陪苦」「羅斯」などその頃には少なくとも蘭学者の間ではかなり通行していたと思われる語にはルビがなく、この頃この語はまだ一般的でなかったようである。「我国に於ては『ペスト』は明治二九年（一八九六）の流行から一般に知られたもの」（『明治前日本医学史』第一巻・P.301）であるらしく、一八九九年の『羅独和訳医学字典』及び『懐中和羅独英医語辞典』では日本語の訳名に「ペスト」が用いられている。

『西説』の「格別剌（コレラ）」（巻十四・霍乱篇第三十九）は「コレラ」の初出ではあるが、『西説』では羅甸名に全て漢字を当てて音訳しており、またこれに漢名「霍乱」を当てて「翻訳」しているので、余り重要な意味を持たず、その後も蘭方書では「霍乱」という訳語が用いられている。第一次コレラ流行（一八二二）の際、蘭館医からコレラ情報を得て宇田川榕庵は『古列亜没爾爸斯説（コレラモルビウス）』を、桂川甫賢は『酷烈剌考』を訳述しており（「日本の医療文化史（58）」）この頃から蘭方医の間にこの語が広まっていったのではないかと思われ、『内科秘録』には「蠆炒（コレラモルビス）」（巻十三・痘瘡）が現れ、『華氏』の「格別良」（巻十六・第八編）にもルビがない。『日本国語大辞典』には『文世書生気質』（一八八五）の用例も挙がっており明治初期には日常語化している。

なお、「コロリと急に卒れると云う意から…大阪では文政の流行を三日古呂利（三日亡、三日倒）と云った」（『明治前日本医学史』第一巻・P.293）らしく、有名な「コロリ」は蘭学者達の間で「コレラ」が知られるようになる以前に用いられており、「コレラ」の訛化

した語ではないのではないかと考えられる。

「インフルエンザ」は『医療正始』(巻二・宗類第一・属類第一)に音訳されているが語の下に「未タ詳ナラス」と注してあり、この語が受け入れられていたとは見なし難く、『華氏』でも「流行性加答児」(巻十三・第七編)と訳している。この語は「明治二十三年の春我が邦にインフルエンツァの大流行ありしとき」(『日本疾病史』P.248)より一般に広まったらしく『対照録』には「印不聆沙(インフルエンザ)」(上・内科病)という訳名もみえ、『日本国語大辞典』の用例によるとその後は小説にも用いられている。

蘭方書類では『西説』以来、蘭語を音訳した「聖京健」「聖京倔」が頻出しており『華氏』にも用いられている箇所(巻九・第五編)もあるが、明治以後は英・独共通の「カタル」(初出『華氏』)にとってかわられ徐々に使用されなくなった。「カタル」の定着後間もなく「胃カタル」、「腸カタル」なども成立している。

同じく『西説』以来の訳語「貌僂屈」にかわって、明治以後、英語の「ヘルニア」が用いられるようになった。

ジフテリアは蘭学期には蘭語の義訳である「義膜咽喉煩衝」、または「義膜咽喉煩衝」が用いられ、『華氏』では「義膜性咽喉炎」(十三巻・第七編)と訳されたが、「明治十年ノ冬ヨリ春ニ至ッテ」(『洋漢病名一覧』後編・喉痺)流行したらしくその頃から「ジフテリア」(独語)が人口に膾炙するようになったようである。

「マラリア」(英・独)の初出は『華氏』(巻十四・第七編)で漢字にルビがあるので、この時期以降に一般化した語であると思われる。『華氏』(巻十八・第九編)には「脊椎加俚斯」がみられるが、「カリエス」(英・独)が定着するのは明治後期である。

「トラホーム」(独語読み)は一八九九年刊の『羅独和訳医学字典』、『懐中和羅独英医語辞典』から現れ、一九五八年刊の『医学大辞典』から(戦後)「トラコーマ」(英語読み)になっている。

「アデノイド」「ノイローゼ」「アレルギー」はいずれも独語読みで、初出が『現代医学大辞典』(一九三二)の昭和初期以降一般的になった語である。

現在用いられている洋語の病名は、独語または英語起源で漢洋混種語も既存の漢語と英独起源の洋語から成っている。

五、おわりに

調査結果をもとに、蘭学成立前から現在に至るまでの病名の変遷を概観してみる。

蘭学成立以前には和語と漢語の病名が存在していた。和語は日常語であり、漢語は殆んどが中国起源で日常語化して和語と同じ様に用いられるものと、専ら医書に於いてのみ用いられるものとがあった。

蘭書翻訳期に入ると、訳語に当てられた既存の漢語の中には意味の変化するものがあらわれ、また蘭語の音訳により洋語が出現し義訳により漢語も新造された。しかしこれらの病名は蘭方医の間だけで通用するものが多く日常語とは程遠いものであった。

明治初めの洋書翻訳期には、合信用語も医学用語に少なからぬ影響を与えたとはいえ、蘭訳医書に使用されていた漢語は殆んど受け継がれたが、新しい概念に対応する和製漢語も大幅に増加した。翻訳方法としては蘭学期に広く行なわれていた直訳的な義訳の他、医学の進歩や用語の充実などもあって、既存の語の組み合わせによる

義訳が多くなった。一方洋語は、一八四九年独語原典からの最初の直接訳である『済生三方』が出、明治元年には初の英訳書『窒扶斯新論』が出て、独語・英語が入ってくるようになり、明治以後、和蘭語からのものは徐々に消えてしまった。また明治以後は、西洋医学も一般的になり情報の流通速度も増したためか、洋語や和製漢語が受容や成立と殆んど時を同じくして小説などに現れ、病名に関しては専門語と日常語の差が著しく縮まったといえそうである。(専門用語であった漢語や洋語の日常化に伴ない、この頃から病名の中の和語の比重が小さくなってくるのではないかと思われる。)

洋書翻訳期が過ぎる頃には、当時の西洋医学の概念に対応する病名も整備されており、その後、新造語は減少している。新造される場合も大抵既存の語の組合せで事足り、それとは別に病名短縮化の傾向もみられるようになる。明治中頃から日本では独語系医学が主流となり、以後、洋語は独語から多く受容されたが、戦後は英語が次第に優勢になり、現在に至っている。

日本語の病名の語彙体系は、蘭学成立に始まり明治初期まで続く洋書翻訳期に大きく変動しており、現在の病名の根幹をなす部分はその時期に形成されている。日本の病名史は洋書翻訳期を抜きにしては語れないのである。

〔附記〕

本稿は、本論と病名の用例を載せた資料集より成る卒業論文を要約したものである。和語の用例については主に『日本国語大辞典』などを参考にし集めたが、資料集の用例の大半は後に記したような引用資料に挙げた資料から直接引いたものである。紙数の都合により、用例の引用は最小限にとどめておいたことをお断りしておく。

引用資料

書名・著者または翻訳者名・成立年・底本・解説の順に記す。

(西洋医学受容以前の医書)

- 病名彙解・蘆川桂洲著・一六八六・京大医学部蔵本・漢方の病名をイロハ順に並べ解説したもの。七巻。

(江戸期の西洋医学翻訳書)

- 西説内科撰要・宇田川玄随訳・一七九二・京大富士川本・日本最初の西洋内科書。原著はゴルテル(蘭)内科書。全十八巻。
- 瘍医新書・大槻玄沢訳・一七九三・京大富士川本(完本現存せず、五十巻中誘導篇四冊のみ)・日本最初の本格的な翻訳外科書。原著はハイステル(独)の外科書。全五十巻。
- 蘭療方・広川獬訳・一八〇一・府立中之島図書館蔵本・原著はアミンデル薬方書。一冊。
- 蘭科内外三法典・橘本宗吉訳・一八〇五・府立中之島図書館蔵本・原著は「縛武得而立数」の書。
- 泰西熱病論・吉田長淑訳・一八一四・京大富士川本・ハクサム(英)熱病論の訳。七巻。
- 眼科新書・杉田立卿訳・一八一五・京大富士川本・最初の西洋眼科書。原著はブレンク(墺)眼科書。全五巻。
- 増補重訂内科撰要・宇田川玄真訳・一八一九・京大富士川本・『西説内科撰要』を校訂増補したもの。全十八巻。
- 泰西疫論・新宮涼庭訳・一八二三・京大富士川本・フーフェラント(独)及ひコンスブルッフ(独)内科書の抄訳。
- 西医知要・宇野蘭斉訳・一八二五・府立中之島図書館蔵本・原著者はスウィーテン(蘭)。
- 泰西方鑑・小森桃塢・一八二九・京大富士川本・原著者はテーデン(独)。全五巻。
- 瘍科新選・杉田立卿・一八三〇・京大富士川本・ブレンク(墺)外科書の翻訳。日本最初の外科全書。全四巻。
- 医方研幾・足立長雋・一八三一・京大富士川本・ストルク(墺書)の翻

訳。全三巻。
◦泰西内科集成・小関三英・一八三二・京大富士川本(一～三巻)・原著者はコンスブルック(独)。六巻まで出版された。
◦医療正始・伊東玄朴・一八三五・京大富士川本・ビショッフ(独)書の翻訳。全二十四巻。
◦泰西名医彙構・箕作阮甫編・一八三五～四二・京大富士川本・チットマン(独)らを翻訳して西洋医学を紹介し論評を加えた一種の医学雑誌。
◦扶氏経験遺訓・緒方洪庵・一八四二～五六・中之島図書館蔵本・フーフェラント(独)診断学書の翻訳。全二十五巻。
◦幼々精義・堀内素堂・一八四三・京大富士川本・最初の西洋小児科書。
フーフェラント(独)小児科書の翻訳。全七巻。
◦察病亀鑑・青木周弼・一八五七・京大富士川本・原著はフーフェラント診断学書。全三巻。
◦西医脈鑑・広元恭瀬・一八五七・京大富士川本・原著者はアモル。二巻。
◦済生三方・杉田成卿・一八六一・京大富士川本・日本初の独語からの直接訳。原著はフーフェラント書。全三巻。
◦外科医法・佐藤尚中・一八六五・京大富士川本・原著はストローマイエル(独)外科書。三巻。

(蘭学成立後の日本医書)

◦瘍科秘録・本間玄調・一八三七・京大富士川本・漢・蘭医方を折衷した外科書。病名は漢方系。全十巻。
◦療治捷言・新宮涼庭・一八四二・京大富士川本・蘭方医書。全三巻。
◦蘭学実験・不明・一八四八・中之島図書館蔵本・蘭方医学による治療例を示したもの。三巻。
◦続瘍科秘録・本間玄調・一八五九・京大富士川本・漢・蘭方折衷書。全五巻。
◦内科秘録・本間玄調・一八六四・京大富士川本・漢・蘭方折衷内科書。

(明治以後の医書及び医学辞書)

◦華氏内科摘要・桑田衡平訳・一八七六刊・京大富士川本・原著者は米ペンシルヴァニア大学の Hartshorne。全二十二巻。
◦洋漢病名一覧・後編・栗原順庵著・一八七九年刊・京大富士川本・洋病名は英語系。
◦漢洋病名対照録・第三版・落合泰蔵著・一八八八年刊・京大富士川本・著者は陸軍の軍医。病気の漢名・和名・洋名(ドイツ語またはラテン語)・訳名を対照し、略解を付したもの。以後の医語辞典・医学事典は編著者名の下に出版社名をあげる。
◦袖珍医学辞彙・第三版・伊地知英太郎・新宮涼庭纂輯・東京書肆・一八九三
◦羅独和訳医学字典・第四版・川村正治・宮地良治纂譯・南江堂・一八九九刊
◦懐中和羅独英医語辞典・日高昇著・南江堂・一八九九刊
◦独羅和訳新医学大辞典・恩田重信編・金原商店・一九〇六刊
◦実用和独羅医語字典・椎野鋒太郎・西成甫・歌川弐共編・金原商店・一九一一刊
◦日独羅医語新字典・大島櫟著・吐鳳堂書店・一九一三刊
◦独羅和訳医語新字典・興津磐・大島櫟共編・吐鳳堂書店・一九二三刊
◦最新医薬学大字典・南江堂・一九二四刊
◦現代医学大辞典・総索引篇・春秋社・一九三二刊
◦西日医学大辞典・一九四四刊
◦南山堂医学大辞典・一九五四刊
◦羅英独仏・和対照医学大字典・金原出版・一九五八刊
◦常用医語事典・緒方知三郎編・金原出版・一九六八刊

(中国在住の英人医合信の著書)

◦全体新論・一八五一・京大富士川本
◦西医略論・一八五七・中之島図書館蔵本
◦内科新説・一八五八・京大富士川本

参考文献
・富士川游『日本疾病史』明治四五年初版　昭和四四年覆刻　平凡社
・富士川游『日本医学史綱要』昭和八年初版　昭和四九年覆刻　平凡社
・日本学士院日本科学史刊行会編『明治前日本医学史』昭和三〇年　日本学術振興会
・斎藤　静『日本語に及ぼしたオランダ語の影響』昭和四二年　東北学院大学創立八十周年記念図書出版委員会
・阿知波五郎『近代日本の医学』昭和五七年　思文閣出版
・宗田　一「日本の医療文化史（55）」（『Neue Informa』昭和五八年七月号　日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社）
・宗田　一「日本の医療文化史（58）」（同右十月号）